

「お父さんと」

石原 一美（愛媛県新居浜市／32歳 女性）

お父さん、お母さん。

これから私は元気にお過ごしは希望しています。

お父さんが私たちの前からいなくなってしまうのは、私の結婚式の1週間前、1月16日だったね。

お父さんは結婚式に合わせていよいよ調整のために入院をきこっていたころ、緊急入院になったそのまま逝ってしまうもった。今でもお父さんが、「悪い」「一美、あと1週間もなごうけど、頼む。」と懇願していたころ、鮮明に覚えています。いつも我慢強いお父さんのあんな苦悶のような姿を見るのは本当に辛いし、今でも思い出す度胸が痛くなるかも。

お父さんは病気を言われた日から、ずっと苦しんでいた。いつも自分が死んでしまっかわからない不安、中々良くなるまで焦る気持ちが、何と自分だけ、そのつらくなったら楽になるのか・・・という腹立たしげ。

仮にも私は看護婦なのだし、そんな辛い気持ちをわかってあげられないくせに本能的にゆめ。病院で働いている時の自分なりのケアが、ご家族帰ってみると主眼で、いつも葛藤していた。お父さんの残りの時間を一緒に過ごしたくて新居浜に帰ってきたのに、体調を悪くはかりごしも「あはは々々、いじごも々々。」とロクめな言いつ、もっとお父さんといろんな話をたくさんしておきたかったと思う。魚のそばき方に始まって、人生のじい、家族のじい、人間関係のじいも仕事のじい、もっとお父さんに教えてほしかったじいがあったんもある。何となくいつか気が来たように。

お葬式が終わって1ヶ月、正直涙はあつたけど、結婚式はお父さんの希望通りあげたことになりまいた。そして、お父さんがいなくなると、ハーシントンロードを誰と歩くかという話になり、プランナーの方と打ち合わせをした時です。じいじい・・・と中々決まらない中、プランナーさんが何故か突然席を立ち、裏に行ってしまうもった。そして、ごめんねと涙を浮かべていきました。

「お父さん、後でいいですよ。お母さんと一緒に、いっしょにいられていいかも。」

私は素直に、「あぁ、来てくれたんだ。」って思った。普段ならそんな非科学的な事を言われても信じないのに、不思議だったな・・・。一緒にいた一樹とお母さん、プランナーさんと4人で泣いてしまったよ。私たちは鈍感で、気がなかつたから、プランナーさんに伝えられなかったって思った。「お父さんらしいな。」って、嬉しかった。

お父さんは生きている時からいっしょに約束を守っていた。死んでもいっしょにいられたんだね。一緒に結婚式に来てくれてありがとう。約束を守ってあげて、本当にありがとう。

今、お父さんからの引き継いだ命は、私たちの子供へと繋がっています。

私がいかに進む道、それはお父さんのお父さんにしてあげられなかったことを、同じように苦しむ人達に向けてあつてほしいです。辛い気持ちに寄り添って、その人の希望に沿った生活を実現してほしいようにサポートしたい。そして、残された時間を家族と楽しむ適切な過ごし方。そんな仕事をライフワークとして、生涯にわたって活動していきたいと思っています。

だからお父さん、いざならぬ思いをついてくれたこと。

途中、辛くなったらお父さんの事を思い出してね。

そしてこれからもずっとそばにいますよ。



白い羽根のポスト